

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00244

研究課題名（和文）ショパン作品の演奏におけるヴァリアントの選択と即興的表現の研究

研究課題名（英文）Study of the Choice of Variants and Improvisational Expression in the Performance of Chopin's Works

研究代表者

多田 純一（Tada, Junichi）

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・客員研究員

研究者番号：90635278

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、フリデリク・ショパンの作品における演奏表現、とりわけ、ヴァリアントの選択と即興的表現について考察した研究である。

第18回ショパン国際ピアノ・コンクールにおける参加者の演奏表現について、《バラード》全4曲を例に挙げ、どのような箇所でヴァリアントの選択が行われるのかについて、最初にチェックポイントを設定した。続いて、そのチェックポイントに基づき、実際の演奏を分析し、どのような傾向があるのかを明らかにした。また、第18回ショパン・コンクールおよび第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール参加者のエディションの使用情報を入力し、その内訳を資料として提示すると共に、使用状況の傾向を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究における成果の学術的意義として、ショパン自身が作曲家として持っていた多様性に基づくヴァリアントが、具体的にピアニストにとってどのように選択され、表現されているのかを明らかにした点が挙げられる。この成果は、ピアニストに限らず、ピアノ教師およびピアノ学習者、あるいは音楽愛好家が、ショパンの作品を演奏する、あるいは聴取する際に役立つものである。

また、2つのコンクール参加者のエディション使用情報については、本研究が学術的に有意義であることがポーランド国立フリデリク・ショパン研究所に認められ、その信頼関係によって得られた。主に使用されているエディションの最新の傾向を知る有益な情報である。

研究成果の概要（英文）：This study considered the performance expression in the works of Fryderyk Chopin, particularly in terms of variant choice and improvisational expression. Using the four Ballades as an example, it first set up the checkpoints for the performance expressions of the participants in the 18th International Chopin Piano Competition to determine at what points variants were chosen. Then, based on the checkpoints, actual performances were analyzed to clarify what kind of tendencies existed. It also obtained the list of the editions used by the participants of the 18th International Chopin Piano Competition and the 1st International Chopin Competition on Period Instruments, and offered the detailed analysis as data and identified trends in usage.

研究分野：音楽学

キーワード：ショパン ヴァリアント ショパン国際ピアノ・コンクール ショパン国際ピリオド楽器コンクール 演奏表現 ヴァリアント 即興性 エディション ショパン受容

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) ショパンは広く知られた作曲家であり、かつ作品の多くがピアノ独奏曲であることから、演奏される機会が多く、さまざまな校訂者や編集者により多くの楽譜が出版されてきた。20世紀後半からはショパンが関わったとされる資料を底本とした「原典版 Urtext」が複数の出版社から出版された。そのような時代の流れの中で、イグナツィ・ヤン・パデレフスキ他校訂による『ショパン全集』(以下、パデレフスキ版と呼ぶ)が主に使用されてきた。しかしながら、21世紀に入ると資料研究や楽譜の校訂の方法論が再検討され、新たなエディションが使用されはじめている。ポーランドが国家事業として取り組み2010年に全集として完結した、ヤン・エキエル校訂『ナショナル・エディション』の新版、ノルベルト・ミュレマン校訂による『ヘンレ原典版』の新版、ジョン・リンクが編集責任者であるペータース社の『ショパン全集 新批判校訂版』が順次出版されており、さらにベーレンライター社も新たな原典版を出版しはじめている。

21世紀に入って出版されたエディションは、ショパンが関わったとされる手稿譜(自筆譜、筆写譜)や校正刷り、初版および第2版や第3版、複数の弟子の楽譜への書き込みといった現存する主要な資料を網羅することで、20世紀後半に出版されたエディションよりも多くのヴァリエーションが示されている。ヴァリエーションが提示され、ショパンの音楽の多様性が認識されたことで、パデレフスキ版を主として使用しつつ、追い求められてきた「ショパン的」な演奏に揺らぎが生じてきている。演奏者が複数のヴァリエーションから、自身が選択した音や記号から、新たに「ショパン的」な演奏を提示することが可能になってきている。

(2) 2018年9月には、第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールが開催された。ショパン存命当時の楽器を使用し、ショパン・コンクールのピリオド楽器のヴァージョンである。日本人の川口成彦が第2位に入賞したことで大きく取り上げられ、日本国内においてピリオド楽器によるショパン作品の演奏が増加している。このコンクールでは、ピリオド楽器の演奏者ならではの解釈や即興的な演奏がなされた。優勝者となったトマシュ・リッテルは第1次予選において《エチュード》Op.25 No.5の最後の音から前奏的に《バラード》Op.38の冒頭のような「つながり」を加えた後、《バラード》Op.52の演奏へとつなげた。ファイナリストのひとりであるドミトリー・アプロギンはさまざまな作品に対して前奏を追加した。このようなアプローチは5年に1度継続的に行われ「ショパン的」な演奏が争われてきたショパン・コンクールでは見られない表現である。このように、21世紀以降に出版された楽譜によって新たなヴァリエーションが提示され、「ショパン的」な演奏に変化が見られることに加え、ピリオド楽器では即興的演奏が演奏に含まれるようになった。本研究では、これらの演奏表現の変化が2020年に行われる第18回ショパン国際ピアノ・コンクールにおける演奏表現に影響を与えると予測した。

(3) 第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールの先行研究としては、2019年3月13日、一橋大学インテリジェントホールにて行われた、シンポジウム「歴史的ピアノと音楽文化 - 第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールをふりかえる」(司会:小岩信治、パネリスト:小倉貴久子、松尾梨沙、太田垣至、ゲスト:川口成彦)および、加藤一郎による論文「第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール」の芸術的・社会的意義に関する研究:演奏解釈と楽器及び楽譜の関連を通して」(2019、国立音楽大学『研究紀要』第53巻第1号、pp.91-102)が見られるが、いずれも第18回ショパン国際ピアノ・コンクールにおける演奏表現に与える影響や予測にまでは踏み込んでいない。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、ショパン作品における演奏表現について、ヴァリエーションの選択と即興的表現の2つの観点から、その在り方を考察することである。主にショパン国際ピアノ・コンクール(以下、ショパン・コンクールと呼ぶ)における参加者の演奏から、ヴァリエーションの選択の有無および即興的表現の内容およびその演奏に対する評価を考察すると共に、エディション選択との関連性も考察に含む。ショパン・コンクールは、もっとも優秀なピアニストではなく、もっとも「ショパン的」な演奏をするピアニストを選出するコンクールとして知られてきた。そのため、明らかに才能があると認められるピアニストが参加者にいたとしても、第12回(1990年)や第13回(1995年)では優勝者を出していない。しかしながら、近年ではその傾向が変わりつつある。第15回(2005年)にラファウ・ブレハッチが30年ぶりのポーランド人優勝者となり、彼が伝統的なショパン作品の演奏法を模範的に示したことで、それまでの「ショパン・ピアニスト」を輩出するショパン・コンクールとしての役割は終えたという意見もある。ここで、本研究において着目したのは「ショパン的」な演奏という評価の在り方である。21世紀に入り、新たなエディションにおいて、多くのヴァリエーションが示されていることは先に述べた通りである。また、ピリオド楽器奏者による即興的演奏が表現として受け容れられつつある。これらの要素が入り混じって「ショパン的」な演奏解釈には変化が生じており、第18回ショパン・コンクールにおける演奏表現に影響を与えると予測した。

(2) 研究開始時の研究の概要として以下の4点を挙げた。

1. 第18回ショパン国際ピアノ・コンクールにおける参加者の演奏表現について、ヴァリアン

トの選択および即興的演奏の有無を分析する。また、参加者へのインタビューを実施し、演奏表現とエディション選択の関連性を考察する。

2. 国際ショパン・コンGRESに参加し、コンクールにおける演奏表現について研究者間の意見交換を行い、報告する。

3. コンクール参加者が使用したエディションの一覧資料を入手し、第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール参加者が使用したエディションとの比較考察を行う。

4. コンクール後に行われる演奏会において、ピリオド楽器奏者の演奏とモダン楽器奏者の演奏の相違点を再考し、コンクールの影響を考察する。

3. 研究の方法

過去3年間に研究を実施した他の研究者も同様であると思われるが、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策により、本研究でも当初の予定よりもスケジュールが大幅に変更され、それによって部分的に研究の方法および概要を変更せざるを得なかった。

研究開始時の研究の概要として提示した「1. 第18回ショパン国際ピアノ・コンクールにおける参加者の演奏表現について、ヴァリアントの選択および即興的演奏の有無を分析する。また、参加者へのインタビューを実施し、演奏表現とエディション選択の関連性を考察する」については、まず2020年10月に開催予定であった第18回ショパン国際ピアノ・コンクールが2021年10月に1年延期されたことにより、初年度の研究計画をコンクール開催までの準備期間に位置づけた。ショパン・コンクールの第1次予選および第2次予選の選択曲に指定されている《バラード》全4曲について、具体的にどのような箇所でもヴァリアントの選択が行われるのかについてチェックポイントを設定し、論文として発表した。また、この文章の後半部分である「参加者へのインタビューを実施し、演奏表現とエディション選択の関連性を考察する」については、2021年10月に現地開催され、研究代表者である多田純一、研究協力者である岡部玲子が現地調査を実施した(2021年10月3日から10月23日)。しかしながら、会場にてマスク着用が義務付けられていたこと、さまざまな規制の中でコンクール参加者に対して接することが難しかったため、インタビューの実施は断念した。コンクールにおける演奏については、前年に論文として発表したチェックポイントに基づいて、具体的にどのようなヴァリアントの選択が行われていたのかについて考察し、論文として発表した。

「2. 国際ショパン・コンGRESに参加し、コンクールにおける演奏表現について研究者間の意見交換を行い、報告する」についても、2020年に開催予定であったが、2021年3月に延期され、その後、さらに2021年12月に延期された(2021年12月1日から12月4日)。研究代表者である多田、研究協力者である武田幸子がエントリーし、いずれもアブストラクトが受け入れられ発表者として選出された。メールを受け取ったのが2020年6月末のことである。多田は日本人として最初に「ショパン弾き」と呼ばれた澤田柳吉の音楽活動、武田は日本に現存する唯一のショパンの手稿譜(筆写譜)を切り口に、結論部分でそれらの事象が現在のショパン演奏へとどのようにつながるのか、という考察を含める予定であったが、ショパン・コンクールが延期されたため、考察に含むことができなかった。そのため、それぞれの研究発表において、日本におけるショパン受容に関する調査および考察を充実させることで、それに置き換えた。この文章の後半部分である「コンクールにおける演奏表現について研究者間の意見交換を行い、報告する」ということについては、コンGRES開催直前にオミクロン株が流行し、ショパン・コンクールの審査員を務めたジョン・リンクをはじめ、多くの研究者が国境を超えることができず、オンラインと現地開催のハイブリッド型となったため、これについても断念した。

「3. コンクール参加者が使用したエディションの一覧資料を入手し、第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール参加者が使用したエディションとの比較考察を行う」については、ポーランド国立フリデリク・ショパン研究所との複数回の交渉および面会により、段階的にすべてのエディションの一覧資料を入手することができた。2つのコンクールの参加者によるエディション選択についてデータとして示し、その傾向を考察した。

「4. コンクール後に行われる演奏会において、ピリオド楽器奏者の演奏とモダン楽器奏者の演奏の相違点を再考し、コンクールの影響を考察する」については、コンクールに翌年に開催された、「ショパンと彼のヨーロッパ」国際音楽祭について、研究代表者の多田、研究協力者の武田が現地調査を実施した(2022年8月13日から8月31日)。この音楽祭ではショパン・コンクールにおける第1位から第6位までの入賞者全員(8名)が演奏会を行った。

4. 研究成果

「3. 研究の方法」にて明らかにした通り、本研究の初年度は2021年10月に延期されたショパン・コンクールへの準備期間として、《バラード》全4曲について、具体的にヴァリアントの選択が行われる可能性がある箇所をチェックポイントとして設定した。4曲の《バラード》に示されるヴァリアントの中から、耳で聴いて判読することができる箇所を抽出し、そのヴァリアントが何に起因するのか資料間の違いを考察した。また、それらの違いが21世紀に出版されている原典版ではどのように示されているのか、ということと比較することができる一覧表も提示した(多田純一、岡部玲子、武田幸子「ショパンの作品におけるヴァリアントの選択 - 《バラード》の場合 - 」、2021、奈良佐保短期大学『研究紀要』第28号、pp.1-16)。

本研究2年目においてショパン・コンクールについて現地調査を実施し、その演奏について考察した。本研究における中核となる、「ショパン的」な演奏解釈には変化が生じていることにより、第18回ショパン・コンクールにおける演奏表現に影響を与えるという予測は、即興的な演奏としては行われなかった。しかしながら、第5位に入賞したレオノーラ・アルメッリーニは第2次予選の1曲目に《ソステヌート》(遺作)からそれほど間をおかずに2曲目の《ワルツ》Op.34 No.1を演奏した。入賞者コンサートでは《ソステヌート》と《バラード》Op.47の組み合わせで選曲しているが、その際にもこの2つの作品は間をおかずに連続して演奏しており、《ソステヌート》が前奏曲として位置付けられているというように、プログラミングに工夫が見られた。その手法は第2位入賞の反田恭平の場合にも見られ、第3次予選において、《ソナタ》Op.35の後、十分な時間を取り、《ラルゴ 神よ、ポーランドをお守りください》に続けて《ポロネーズ》Op.53を演奏した。《ラルゴ 神よ、ポーランドをお守りください》および、優勝者であるブルース・リウが演奏した《「ドン・ジョヴァンニ」の『お手をどうぞ』による変奏曲》Op.2は、コンクール以降、この作品が演奏される機会が急増しており、これまで演奏される機会の少なかった作品に焦点があてられるようになってきた点が第18回ショパン・コンクールの特徴のひとつである。

《バラード》全4曲について、コンクールでは具体的にどのような箇所でもヴァリアントの選択が行われたのかということについては、本予選の第1次予選では42名(第1番:14名、第2番:4名、第3番:6名、第4番:18名、第2次予選では27名(第1番:3名、第2番:8名、第3番:8名、第4番:8名、第3次予選では2名(第2番:2名)が《バラード》を演奏し、前年に論文として発表したチェックポイントに基づいて全演奏を分析した。1. ばらつきがあまり見られなかった箇所、2. ばらつきがある程度見られた箇所、3. ばらつきが著しく見られた箇所、の3通りに分類して考察し、その傾向を明らかにした。紀要発行のスケジュールから論文の発表は最終年度となった(岡部玲子、多田純一、武田幸子「第18回ショパン国際ピアノ・コンクールにおける演奏者のヴァリアントの選択 - 《バラード》全4曲を例として - 」、2022、『つくば国際短期大学紀要』第48輯、pp.29-60)。

また、国際ショパン・コンGRESS 2021 International Chopinological Congress Through the Prism of Chopin: Reimagining the 19th Century, Warsawにおいて、研究代表者である多田が「Musical Activities of the First Japanese 'Chopin Pianist' Ryukichi Sawada (1886-1936): Focusing on Chouwa-gaku (Harmonized Music)」、研究協力者である武田が「The Acquisition of a 19th-Century Manuscript to Japan: Stichvorlage Copy of Mazurka C major Op.33 No.2」をテーマとし、英語で口頭発表を行った。

本研究の最終年度において、「ショパンと彼のヨーロッパ」国際音楽祭で行われた演奏について、雑誌記事としてレポートを発表した。本研究が着目したうち、ヴァリアントの選択は積極的に行われていることを先に挙げた論文にて明らかにすると共に、即興演奏については行われなかったことについても論文にて言及した。では、コンクールの参加者が即興的な演奏表現に興味を持っていないのか、ということ、そうではないことが「ショパンと彼のヨーロッパ」国際音楽祭で明らかになった。例えば、ショパン・コンクール第3位入賞者であるマルティン・ガルシア・ガルシアは音楽祭において8月18日にリサイタルを開催した。ショパンの作品では《ワルツ》遺作、《ワルツ》Op.64 No2、《3つのワルツ》Op.34などが演奏されたが、繰り返し部分でルフランの強調の仕方やテンポ、装飾音の付加など、即興的な変奏を加えて演奏していた。このことは、つまり第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールで提示された、ショパンの時代に行われていた即興的な演奏表現を、モダン楽器で演奏するピアニストも実践しようとしていることの意味である。コンクールでは審査員によって評価が分かれることをおそれてヴァリアントの選択のみに留められたが、コンクールの後の演奏会では演奏に即興的な表現を加えている。そのことは、第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールにおける演奏表現が、第18回ショパン・コンクールにおける演奏表現に影響を与えるという、本研究が着目した予測が、完全ではなくとも、その方向性として概ね正しかったということになる。ただし、すべてのピアニストに共通している訳ではなく、今後の動向については見守る必要がある。特に、2023年10月に開催予定の第2回ショパン国際ピリオド楽器コンクール、2025年10月に開催予定の第19回ショパン・コンクールにおいて、どのように変化するのか(あるいは変化しないか)、一般化されていくのかどうか、ということについては、研究の継続が必要とされる。

また、ポーランド国立フリデリク・ショパン研究所が出版するジャーナル The Chopin Review 4-5 合併号において、東アジアにおけるショパン受容が特集として生まれ、研究代表者である多田がそのうちの日本を担当した。「Chopin in Japan: From Ongaku Torishirabe Gakari to Forest of Piano」というタイトルの論文が掲載され、この論文の中においてショパン・コンクールにおける日本人入賞者について言及している。さらに、国際ショパン・コンGRESSにて取り上げた、日本人として最初に「ショパン弾き」と呼ばれた澤田柳吉の人物伝についても2023年7月に出版予定である。

第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールおよび第18回ショパン・コンクールの参加者が使用したエディション選択については、表としてまとめたデータを示し、その傾向を考察した論文を、岡部、武田、多田の連名にて執筆し、現在、査読中である。この論文が掲載されれば、各年度1件、計3件の紀要論文発表および1件の国際ジャーナルにおける英文論文、2件の国際学会発表、1件の著書出版に加え、その他、招待講演および雑誌記事などの成果が含まれ、充実した研究成果を得たと報告することが可能である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 岡部玲子	4. 巻 -
2. 論文標題 「ショパン国際ピアノコンクール2021 ハイレベルな競演」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 WEB掲載 ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス ウェブサイト http://gakufu-ymm.com/feature/Chopin_score/essay.html	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 多田純一、岡部玲子、武田幸子	4. 巻 28
2. 論文標題 ショパンの作品におけるヴァリエーションの選択 - 《バラード》の場合 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 奈良佐保短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡部玲子	4. 巻 -
2. 論文標題 インガルデンの音楽論により解決へと導かれたショパンのエディション問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ポーランド広報文科センターウェブサイト内「ロマン・インガルデンの年」 https://instytutpolski.pl/tokyo/rok-romana-ingardena-jp/	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡部玲子	4. 巻 2
2. 論文標題 ショパンの楽譜、どの版をえらばいいの？	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊ピアノ	6. 最初と最後の頁 100-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡部玲子、多田純一、武田幸子	4. 巻 48
2. 論文標題 第18回ショパン国際ピアノ・コンクールにおける演奏者のヴァリエーションの選択 - 《バラード》全4曲を例として -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 つくば国際短期大学『紀要』	6. 最初と最後の頁 29-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tada Junichi	4. 巻 4-5
2. 論文標題 Chopin in Japan: From Ongaku Torishirabe Gakari to Forest of Piano	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The Chopin Review	6. 最初と最後の頁 118-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.56693/cr.10	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 多田純一	4. 巻 11
2. 論文標題 ワルシャワ熱狂の夏「ショパンと彼のヨーロッパ」国際音楽祭	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ショパン	6. 最初と最後の頁 48-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田幸子	4. 巻 11
2. 論文標題 第18回「ショパンと彼のヨーロッパ」国際音楽祭	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ムジカノーヴァ	6. 最初と最後の頁 34-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Junichi Tada
2. 発表標題 'Musical Activities of the First Japanese 'Chopin Pianist' Ryukichi Sawada (1886-1936): Focusing on Chouwa-gaku (Harmonized Music)'
3. 学会等名 International Chopinological Congress 2021, 'Through the Prism of Chopin: Reimagining the 19th Century' (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Sachiko Takeda
2. 発表標題 'The Acquisition of a 19th-Century Manuscript to Japan: Stichvorlage Copy of Mazurka C major Op. 33 No. 2'
3. 学会等名 International Chopinological Congress 2021, 'Through the Prism of Chopin: Reimagining the 19th Century' (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡部玲子
2. 発表標題 「ショパンの楽譜、どの版を選べばいいの？～楽譜を扱う上で知っておいてほしい基礎知識」
3. 学会等名 ヤマハミュージックリテイリングスタッフ向け研修会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡部玲子
2. 発表標題 「ショパンの楽譜、どの版がいいの？～最新エディション事情と選び方～」
3. 学会等名 朝日カルチャーセンター講座（立川教室）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡部玲子
2. 発表標題 「ショパン最新エディション情報～エキエル版、他の版と何が違う～」
3. 学会等名 ヤマハ仙台店公開講座（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡部玲子
2. 発表標題 「ショパン最新エディション情報～楽譜から見えてくる、本当のショパン像～」
3. 学会等名 ヤマハ新潟店公開講座（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡部玲子、角野美智子
2. 発表標題 「ショパン・コンクール 祝 開催 緊急対談」
3. 学会等名 Web動画配信 ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス https://www.youtube.com/watch?v=bgVrvVBnU8Q （招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡部玲子、実方康介、上田泰史
2. 発表標題 「ショパンの日2021 ～第18回ショパン国際ピアノコンクール特集番組～」(岡部玲子インタビュー部分)
3. 学会等名 Webライブ配信出演 全日本ピアノ指導者協会ウェブサイト https://www.youtube.com/watch?v=Ekr4UyWX9qw （招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡部玲子
2. 発表標題 招待講演「ショパン最新エディション情報 エキエル版、他の版と何がちがう？」
3. 学会等名 新響楽器西宮北口オーパスホール（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡部玲子
2. 発表標題 ショパンの楽譜を考える
3. 学会等名 (一般社団法人)全日本ピアノ指導者協会 音楽総合力UPワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡部玲子
2. 発表標題 ショパン国際ピアノコンクールで聴こえてきた音～出演者の使用楽譜、ヴァリエーションの選択～
3. 学会等名 (一般社団法人)全日本ピアノ指導者協会主催ピティナピアノステップ レクチャーコンサー（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 多田純一	4. 発行年 2023年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 400
3. 書名 日本初の ショパン弾き 澤田柳吉	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	岡部 玲子 (Okabe Reiko)		
研究協力者	武田 幸子 (Takeda Sachiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関